２０２３年９月１０日　Ｎｏ．３６８４

先週の講壇から　　〝枕する所もない〟

マタイによる福音書　8章14節～22節

聖句「イエスは言われた。『狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。』」(8:20)

１．《不眠の辛さ》　若い頃、私は神経質で枕が変わると眠れませんでした。枕が変わらなくても、心身の不調から眠れなくなる人がいます。更年期障害による不眠、神経症による不眠、過労による不眠もあります。1日の大半を病院のベッドで過さなければならない人、「寝たきり」状態の高齢者もいます。たとえ「枕する所」があっても、辛く苦しいことは一杯あるのではないでしょうか。

２．《苦界と浄土》　2002年に佐賀県で、80歳の妻の介護に疲れた84歳の夫が無理心中を試みて、夫だけが生き残った事件がありました。裁判長は被告の夫に「あなたの奥さんは、既に浄土に行かれた。だから、あなたも心安らかに生きて」と、執行猶予付きの実刑判決を言い渡しました。「浄土」という仏教用語から、逆に「苦界」という語を連想しました。この老夫婦にとって、この世は「苦界」となってしまっていたのだろうと思うと、胸が締め付けられます。「枕する所がない」ということは、家が無いからとは限りません。自分の家があっても「枕する所のない」人は大勢いるのです。ホームレスや難民だけの話ではありません。「寝たきり」状態の人にしても、実は「枕する所がない」のかも知れません。

３．《枕を捨てる》　イエスさまは高熱を出して寝込んでいるペトロの姑を癒されます。すると、噂を聞き付けた近所の人たちが病気や障碍に悩む家族を連れて来るのでした。ここで「イザヤ書」53章の「苦難の僕」の預言が引用されます。主の癒しは魔法のように病が消えてなくなるのではなく、イエスさまが引き受けられていたのです。私たちは誰でも「枕する所」を求めて生きています。しかし、イエス御自身は「枕する所のない」生き方を為さいました。それは「枕する所のない」人たちへの深い共感でした。自分の務めの重さに溜め息をついたり、自らの寄る辺ない暮らしを嘆いておられるのではありません。イエスさまは「枕する所のない」人たちと一緒に生きていこうとされ、私たちにも「この世と共に苦しみなさい」と招いておられるのです。そこにこそ、神の愛が宿るからです。

朝日研一朗牧師